

# 水生植物園における21年ぶりの「かいぼり」実施報告 —市民・企業参画による保全活動の試行—

下田彰子<sup>1,\*</sup>・久保田潤一<sup>2</sup>

<sup>1</sup>国立科学博物館附属自然教育園, <sup>2</sup>特定非営利活動法人 NPO birth

**Akiko Shimoda<sup>1</sup>, Junichi Kubota<sup>2</sup>: Report on the First “Kaibori” (Pond Draining and Cleaning) in 21 Years at the Aquatic Plant Garden: A Trial of Conservation Activities through Citizen and Corporate Participation. Miscellaneous Reports of the Institute for Nature Study (58): 23–32, 2026.**

<sup>1</sup>Institute for Nature Study, National Museum of Nature and Science, <sup>2</sup>Specified Nonprofit Organization (NPO) birth

## はじめに

国立科学博物館附属自然教育園（以下、自然教育園）内の水生植物園において、2025年12月から2026年3月にかけて、21年ぶりとなる「かいぼり」を実施した。

自然教育園内には今回実施した水生植物園を含め4か所の池が存在するが、いずれも長期間かいぼりや浚渫が行われておらず、近年土砂の堆積による水深の減少、富栄養化による水質悪化、および一部の外来種の定着といった課題が顕在化していた。特に外来魚については、近年の調査報告（中江ほか, 2019）においてカダヤシの生息が記録されており、在来生態系への影響が懸念されていた。

水辺の生態系維持において、池底の泥の露出を伴う定期的な「かいぼり」は、水質浄化など水生生物の生育環境を整える上で不可欠な工程である。

本事業の主な目的は、第一に水生植物園における在来

生態系の復元である。そのために必要となる水質改善と、カダヤシ等の外来生物の状況確認および駆除、そして水草類の再生を実現するための作業を行う。第二に、当初となる「一般参加型の有料イベント」および「企業参加による保全活動」を試行し、都市部における自然再生への市民参加モデルの構築を目指すことにある。

本報告では、21年ぶりのかいぼりによって得られた知見、実施した各種教育普及イベントの概要、およびアンケート結果に基づく参加者の感想を記録し、今後の園内における水辺管理のあり方について考察する。

## 自然教育園で近年実施された池の管理

自然教育園には、「水生植物園」「ひょうたん池」「いもりの池」「水鳥の沼」と計4つの池が存在する（図1）。

表1. 自然教育園で実施された2000年代初頭の池管理。

年月	場所	概要
2001年6月	水生植物園	・ 外来魚の駆除を主目的としたかいぼりを実施 ・ ポンプによる排水はせず、堰板操作による減水のみ ・ ブラックバス（成魚2個体、稚魚約600個体）、ブルーギル（約2,000個体）を駆除
2004年5月	水鳥の沼 ひょうたん池 いもりの池 水生植物園	・ 浚渫による堆積土砂の除去を実施 ・ かいぼりで捕獲しきれなかったブラックバス等の外来種駆除が目的 ・ 上流部から順次実施し、水生植物園が最終工程（図2） ・ 水生植物園でブルーギル2,014個体とブラックバス1個体、ひょうたん池でブラックバス1個体を捕獲・駆除

\* E-mail: a-shimoda@kahaku.go.jp

これらの水辺環境を保全するため、2000年代初頭には、表1に示す通り集中的な環境改善事業が実施されている。2004年の大規模な浚渫以降、園内で21年間にわたり大規模な再整備は行われておらず、今回の実施は重要な節目と位置づけられる。

## 実施概要

### (1) 水抜きおよび天日干し

2025年12月14日の生物捕獲イベントに向け、2025年12月4日より、周辺水域との接続部において土嚢お



図1 自然教育園内の池。



図2 水生植物園における浚渫（2004年）。

よび堰板の撤去を順次進め、水生植物園内の池の排水を開始した。急激な水位低下は池内に生息する魚類の流下や生息環境への過度な負荷を招く恐れがあるため、土嚢等の撤去は数日間かけて段階的に実施した。

さらに、排水ポンプを併用し、作業に適した水位への調整を行った。イベント終了後から、約3ヶ月間の「天日干し」期間を維持し、池底の好氣的分解による有機物の分解促進を図った（図3）。

この天日干し期間中、生物捕獲イベントで捕獲された生物については、その種類と生態系的特性に応じて以下のとおり管理を行った。

- 在来魚（クロダハゼ、モツゴ等）：当園バックヤードの水槽にて約3ヶ月間にわたる保護・飼養管理を実施（図4）。2026年3月26日に注水を開始し、水位回復を確認後、元の池に放流した。
- 防除対象の外来種（アメリカザリガニ、カワリヌマエビ属の一種）：水草の茎を切って枯らすなど生態系への悪影響が著しいアメリカザリガニ等については、自



図3. 排水ポンプ。



図4. バックヤードで在来魚を飼養。

然教育園の保存活用計画（国立科学博物館附属自然教育園，2022）の方針に沿って，駆除処分とした。また，カワリヌマエビ属の一種については採取個体の一部を固定し，系統区別のための遺伝解析に活用した。

- その他の外来種・交雑種等（クサガメ等）：現時点で生態系への著しい悪影響が認められないため，今回は駆除対象としなかった。なお，クサガメは外来種であるが水槽管理が困難なため，水生植物園に隣接する「ひょうたん池」へ放逐した。

2026年3月26日に排水ポンプを停止し，落ち口の堰板を再設置することで池への注水を開始した。翌日には，水深は概ねかいぼり前の常時水位まで回復した。水位の回復を確認後，バックヤードで管理していた在来魚を再び元の池に放流した。

## (2) 生物捕獲イベント「自然教育園でかいぼり」

2025年12月14日に，当園初となる一般参加型の有料イベントとして生物捕獲調査を実施した。安全管理上，定員を50名（小学5年生以上対象）とした。

### ①開催概要

- 開催日時と参加者数：2025年12月14日（日）11：00～15：00 参加者数44名  
※午前中雨天のため，開始時間を予定より2時間遅らせた
- 参加費：5,000円
- 募集状況：告知開始からわずか半日で定員50名に達し，高い関心を集めた
- イベント工程：安全管理を徹底しつつ，捕獲だけでなく「学び」の時間も確保した（表2，図5・6）

### ②生物捕獲結果

表3に示す通り捕獲された生物の多くは在来種であり，当園の池の生態系が健全な在来種中心の構成を維持していることが確認された。また，「東京都レッドデータブック（本土部）2023」で「絶滅危惧IA類（CR）」に指定されているクロダハゼが17個体捕獲された（図7）。都心部において本種が定着・生存している例は非常に貴重であると言える。

一方で，2001年に数千匹単位で確認されたブラックバスやブルーギル，およびカダヤシ等の外来生物は確認さ

表2. 「自然教育園でかいぼり」イベント工程.

時刻	項目	内容
11：00	受付	集金，装備（胴長・手袋）の貸出
11：30	開会式	主催者挨拶，「かいぼり」の解説，作業手順・安全上の注意説明
11：50	生物捕獲・調査	池に入って魚類・甲殻類等の捕獲作業，専門スタッフによる同定
	普及啓発展示	捕獲した生物の展示・解説，外来種問題に関するレクチャー
14：00	閉会式	当日の成果報告，捕獲状況の総括，今後の池干し期間のイベント案内，解散



図5. 生物捕獲の様子.



図6. 普及啓発展示の様子.

れなかった。アメリカザリガニやクサガメ等の外来種は少数確認されたものの、捕食圧の強い外来魚が不在であったことが、クロダハゼやモツゴ等の在来魚類が安定して生息できる理由と考えられる。

捕獲されたカメ類については、クサガメ18個体に加え、在来のニホンイシガメとクサガメの交雑個体である「ウンキュウ」が1個体確認された。都市部におけるニホンイシガメの生息やクサガメとの交雑の進行については不明な点が多く、継続的な注視が必要である。

また、捕獲されたクサガメの一部に、足が欠損するなど捕食ダメージを受けた個体が確認された(図8)。園内の生息状況から、特定外来生物であるアライグマによる食害の可能性がある。ブラックバス等の魚類が排除された一方で、陸域・水際部を移動する中型外来哺乳類による在来生態系への圧迫が、新たな管理課題として挙げられる。

なお、過去の記録との比較において、2004年の浚渫時調査ではモツゴ約5,000個体、エビ類約3,000個体が捕獲されているが、今回の捕獲数はそれらに比して少数に留まった。この要因の一つとして、排水プロセスにおける野鳥の飛来が挙げられる。排水開始からイベント当日までの水位低下に伴い、池にダイサギ等のサギ類が飛来し、浅瀬に取り残された魚類や甲殻類を活発に捕食する

様子が確認された。この「天然の捕食圧」により、イベント時点での残存個体数が減少した可能性が高い。しかし、これは「かいぼり」という人為的な環境攪拌が、周辺に生息する野鳥にとって貴重な採餌機会を提供したことを意味しており、園内の生態系ネットワークの中に上位捕食者を支える豊かな餌資源が存在することを示唆している。

一方で、短期間の捕食圧によってイベント時の捕獲数に顕著な影響が出るほど、在来種全体の絶対的な個体数が低い水準に留まっている懸念も否定できない。水生植物園における個体群の維持が、極めて脆弱なバランスの上にある可能性もある。

したがって、今回の捕獲結果を単純な減少と捉えるのではなく、現状の生息密度が「サギ類等の自然な捕食」と「在来種の自然繁殖」の均衡点として妥当なものなのか、あるいは泥が厚く堆積したこと等による環境劣化が原因で繁殖力が低下しているのかを慎重に評価する必要がある。

今後は、かいぼり後の生息環境の改善に伴う個体数の回復過程を注視し、モニタリングしていくことが不可欠である。

表3. 生物捕獲イベントで捕獲された生物.

分類	種名(個体数)
在来種	モツゴ(111), ミナミメダカ(19), クロダハゼ(19), スジエビ(57), ヌカエビ(33)
外来種・交雑種	アメリカザリガニ(7), クサガメ(18), ウンキュウ(1)
その他(不明種)	カワリヌマエビ属の一種(27)



図7. 都内では希少なクロダハゼ.



図8. 捕食により足が欠損したクサガメ.

### (3) 天日干し期間を活用した教育普及・保全活動

生物捕獲イベント実施後、ポンプでの排水を継続することで、泥底ができるだけ見える状態を維持した。水面が消失した「天日干し」の期間を貴重な機会と捉え、以下の①②に示すプログラムを展開した。

#### ①一般向けイベント「池底ガイドウォーク」

普段は立ち入ることのできない池の底を歩き、堆積した泥の状態や水辺の生態系を専門スタッフが解説する観察会を2回実施した。

天日干し期間中の特別プログラムとして実施した本イベントは、普段立ち入ることのできない池底の物理環境（堆積物や粘土層）を直接観察・体験することに重点を置いた。

しかしイベント当日は、池底への立ち入りを断念せざるを得なかった。これは池底からの湧水に加え、過去約20年間にわたって泥が厚く堆積していたこと、そしてこの泥が高い保水力を持っていたため、排水後も広範囲にわたり泥層が軟弱な状態に留まり、歩行が困難な箇所が多く認められたためである。そのため、参加者の安全確保を考慮し、当初計画していた「池底内を歩くツアー」を、

園路上からの定点観察および手動式の土壌採取器具（ハンドオーガー）や塩ビパイプを用いた「泥層のサンプリング・掘削観察」にプログラムを変更した。

特に子供の参加者が多かった第2回は、採取した泥を用いた「泥団子づくり」を実施した。堆積層の深さ別に3種類の泥団子を作成し、それらを水槽に入れて園内の明るい場所に配置することで、層位ごとの埋土種子の発芽特性を比較するモニタリング実験に繋げることとした。

#### ●実施日時と参加者数：

第1回：2026年2月14日（土）10：00～12：00

参加者 19名

第2回：2026年3月1日（日）13：00～15：00

参加者 18名

#### ●参加費：500円

●募集状況：第1回は告知開始から約50分、第2回は1分にも満たずに定員20名に達した

●イベント工程：池底の泥の含水率が高く歩行が困難であった現場状況を考慮し、参加者の安全と教育的効果を最大化させるため、掘削体験を中心とした観察プログラムとした（表4、図9・10）

表4. 「池底ガイドウォーク」イベント工程.

時刻(1回目/2回目)	項目	内容
10：00/13：00	受付	集金
10：30/13：30	趣旨説明等	本プロジェクトの目的、自然教育園の概要、かいぼりの意義、注意事項の共有など
10：40/13：40	池周りの観察	落ち葉の堆積状況や水生生物の観察など
11：00/14：00	池底体験	ハンドオーガーを用いた粘土層の掘削体験。泥の質感や層位を直接確認 ※2回目のみ「泥団子づくり」を実施
11：55/14：55	まとめ	保全の自分事化に向けて、「私たちができること」の掲示など



図9. 池底ガイドウォークの様子.



図10. 深さ別に作成した泥団子.

②企業連携イベント「自然教育園で水辺の再生」

本プログラムは、企業単位での社会貢献活動を目的とした、当園初の試みとして実施した。単なる作業ボランティアに留まらず、専門スタッフによる環境解説と実作業を組み合わせ「体験・研修型」の保全プログラムとして試行した。また、参加にあたっては「寄付つき入園券（1,000円）」の購入を任意でお願いし、当園の自然保全および環境整備への直接的な支援を募った。

プログラムは、家族参加も可能な「池底の掘削」と、大人を対象とした本格的な「除草」の2種類とした。いずれも、かいぼり後の池底に日光を届け、数十年眠り続けてきた埋土種子の発芽を促すという、自然再生の根幹を担う作業である。

●実施日時と参加者数：

第1回（池底の掘削）：

2026年2月28日（土）09：30～12：30 参加者18名

第2回（除草作業）：

2026年3月4日（水）13：00～16：00 参加者4名

※当初3月3日（火）午前を予定していたが、雨天のため翌4日の午後に変更して実施。

第3回（池底の掘削）：

3月14日（土）09：30～12：30 参加者25名

●対象：本プログラムへ参加申し込みを行った企業の社員およびその家族。対象年齢は以下

池底の掘削：小学生以上（中学生以下は保護者同伴）

除草作業：18歳以上（大人のみによる本格作業）

●参加費：50円（保険料）

※別途、寄付つき入園券（1,000円）の購入を推奨

●参加企業数：11社

●募集状況：企業単位での事前申込制とした。IT、建設、鉄道、商社、製造など、業種を越えた企業が参画し、ネイチャーポジティブへの貢献を重視する企業の関心の高さが示された

■池底の掘削（第1回・第3回）

本プログラムでの「掘削」は、単に池底の泥を攪拌することではなく、次世代の生態系を担う「埋土種子」を休眠から目覚めさせることを最大の目的としている。

過去約20年間に堆積したヘドロ層を含む泥の下に、かつて存在した水生植物の種子が含まれている層が存在すると考えられる。具体的なイベントの工程を表5に

表5. 「池底の掘削」イベント工程.

時刻	項目	内容
9：15	受付	集金、装備（胴長・手袋）の貸出
9：30	趣旨説明等	本プロジェクトの目的、自然教育園の概要、かいぼりの意義、作業説明、注意事項の共有
10：00	採泥作業	運営スタッフによる塩ビパイプを用いた採泥実演。各チームに分かれ、指定エリアでの採泥および泥をトロ舟に敷きならす
11：45	粗朶（そだ）作り・設置	木の枝を束ねて生きものの棲み家を作成。粗朶の生態学的効果を解説
12：15	まとめ	取り組みの効果解説など



図11. 「池底の掘削」の様子.



図12. モニタリング用の容器（トロ舟）.

示す。

実際の作業では、池底付近の泥ではなく、堆積したヘドロ層の下を狙ってピンポイントで採泥することに注力した。採取した深層の泥は、モニタリング用の容器（トロ舟）に薄く撒きだし、園内の明るい場所（高木が少なく、ある程度の日照が確保できる開けた場所）へ設置した。これにより、泥の中で長期間にわたって休眠状態にあった種子発芽の促進が期待できる。

なお、本プログラムは当初、参加者が池底に立ち入りスコップ等を用いて直接掘削・採泥を行う計画であった。しかし、ガイドウォーク時と同様、長年の堆積泥が想定以上に軟弱であり、安全な歩行および作業が困難であることから、塩ビパイプによる採泥に変更した。具体的には、池底へ深く立ち入る代わりに、園路や足場から塩ビパイプを池底に突き刺し、泥を抜き取る手法で、足場には比較的安価で持ち運びしやすい「ポリカーボネート中空ボード」を利用した。

#### ■増えすぎた草の除草（第2回）

本作業は、水生植物園に繁茂しすぎたヒメガマやマコモなどの抽水植物を適切に管理し、開放水面を確保する

とともに、池底まで光が届く環境を再生することを目的としている。これらの植物は地下茎でつながっており、地上部の刈り取りだけでは再生を抑制できない。そのため、かいぼりによって水が引いたこの時期に、根茎から掘り取る「抜根」を行うことで、完全に除去することを目指した。具体的なイベントの工程を表6に示す（図13・14）。

抽水植物は適度に残存すればトンボなどの生息場所として機能するが、過密状態では水域を狭め、池底への日照を遮ってしまう。本プログラムでは、除草作業に加え、水草の生態や種多様性のバランスに関する専門的な解説を交えた。これにより、作業を通じた「環境整備」の実践とともに、生態系の仕組みを深く理解する「教育的効果」の高い研修機会となった。

### プログラム参加者の意識

第2回池底ガイドウォークが募集開始直後の1分で定員枠が満員となるなど、本事業の一連のプログラムはいずれも高い関心を集めた。アンケート結果の概要から、

表6. 「増えすぎた植物の除草」イベント工程.

時刻	項目	内容
13:00	受付	集金, 装備 (胴長・手袋) の貸出
13:15	趣旨説明	本プロジェクトの目的, 自然教育園の概要, かいぼりの意義, 作業説明, 注意事項の共有
13:30	除草作業	スタッフの実演後, ヒメガマ等の掘り取り・引き抜き作業を開始。実際の植物を観察しながら, 地下茎の構造や抽水植物の生態, 過密化による影響について専門的な解説も実施
14:45	運搬・撤収	刈り取った植物をトラックまで運搬
15:00	まとめ	取り組みの効果解説など



図13. 「増えすぎた植物の除草」の様子.



図14. 除去した植物遺体.

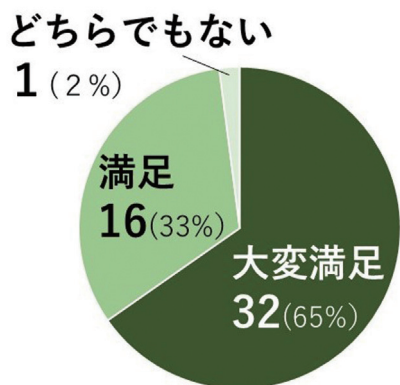


図 15. 生物捕獲イベント「自然教育園でかいぼり」の満足度 (n=49).

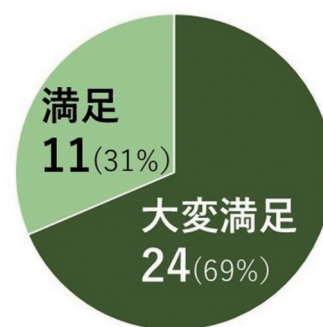


図 16. 一般向けイベント「池底ガイドウォーク」の満足度 (n=35).

プログラム参加者の意識を以下に整理する。

### ①生物捕獲イベント「自然教育園でかいぼり」

参加後のアンケート調査では、図 15 に示す通り、回答者の 98% が「大変満足」「満足」と回答した。回答理由として、実体験に基づく体験価値や、専門的解説への関心などが挙げられた。また、作業の忙しさに対する意見もあった。そのほか自由意見としては、泥にはまるなど身体を通じた環境理解や、かいぼり後の興味など継続的な関心のほか、参加費の高さなど運営への提言があった。

#### ■主な回答理由

- テレビで懂れていたかいぼりを初めて体験できた
- 泥まみれになることで池の様子が分かった
- 色々な動物の説明が聞けた
- かいぼりは楽しめましたが、生きもの採集の余裕がなかった

#### ■その他の自由意見

- 泥深く歩きにくかったですが、楽しかった
- 雨天でやらないかと思ったが、結果的にやれて良かった
- 5,000 円の参加費はやや高い。開始前に教育園について講義しても良いのでは
- 貴重な体験ができました。ドロにはまってあんなに動けなくなるとは思わなかった
- 来年かいぼり後に見にきたい

### ②一般向けイベント「池底ガイドウォーク」

参加後のアンケート調査では、図 16 に示す通り、回答者の 100% が「大変満足」「満足」と回答した。回答理

由として、希少な体験価値や、身体を通じた理解が挙げられた。そのほか自由意見としては、普段は見えない水面下の池底への想像力の広がりや、非日常の充足感などの回答があった。

#### ■主な回答理由

- 初めての経験で楽しかった
- 泥団子を作れたり、20 年ぶりのかいぼりで興奮した
- 池の底を実際に歩くことができた

#### ■その他の自由意見

- 募集人数や回数が増えるともっと良いと思った
- 普段体験できないことが体験できてとても楽しかった
- 次回来た時、池の底をイメージできるのがおもしろい

### ③企業連携イベント「自然教育園で水辺の再生」

参加後のアンケート調査では、図 17 に示す通り、回答者の 97% が「大変満足」「満足」と回答した。回答理由として、当事者意識と達成感や、学びと体験の融合などが挙げられた。

#### ■主な回答理由

- 普段は入れないところで、普段できないことができた
- 池に入って深く関わられた
- 達成感があった
- 体を動かして楽しく、役に立てたと思えた
- 体験しながら自然共生を学べる

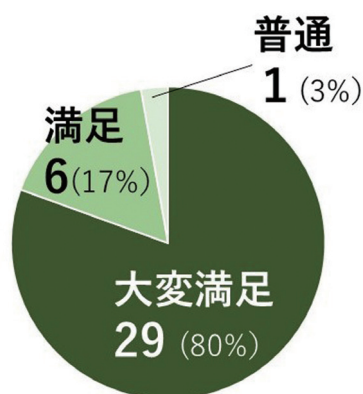


図 17. 企業連携イベント「自然教育園で水辺の再生」の満足度 (n=36).

- もっと生き物が見られると思ったが、そうではなかった

#### ■その他の自由意見

- これから種子が芽吹くのが楽しみ
- フィールドワークの機会が都心では貴重で参加意義が大いにあった

## 今回のかいぼりで得られた知見と今後の展望

### (1) 水生植物園における生態系の現状

今回のかいぼりを通じて、当園における生物相および生息環境の現状が、以下のとおり明らかになった。

#### ①生物相の健全性

今回のかいぼりで捕獲された生物を見ると、外来種の混入が少なく、在来種を中心とした生態系が維持されていた。これは、前回のかいぼり後、長年にわたる人為的な移入の防止や、当園の管理体制が功を奏している証拠であり、大きな成果といえる。

#### ②生息密度の低下とモニタリングの必要性

一方で、捕獲された在来種の個体数そのものは想定よりも少なく、生息する個体数が減少している可能性もある。これについては、水深が浅くなったことでサギ類等の鳥類による捕食圧が高まった影響も否定できない。今回得られたデータを基準とし、捕食圧の影響も含め、今後の回復過程を追うための継続的なモニタリング体制の構築が急務である。

#### ③泥の堆積による環境劣化

今回、池底に厚い泥が堆積していることが分かった。これらの堆積物には長年蓄積された有機泥（ヘドロ）も含まれ、水深の減少と嫌気化を招いていると考えられる。

このような環境悪化は、水生植物の種子発芽を阻害するだけでなく、底生生物や魚類の生息環境を悪化させている可能性もある。健全な水辺生態系を中長期的に維持・再生するためには、物理的な土砂除去（浚渫）の検討が必要な段階にある。

### (2) 市民・企業参加型保全プログラムの有効性

本事業のもう一つの大きな成果は、有料の保全型プログラムが市民や企業から極めて高い関心と満足度を得たことである。

#### ①能動的な保全・学習プログラムに対する高い関心

自然教育園では、これまで、観察会や講座を中心とした「知識提供型」の教育普及活動を主軸としてきた。しかし、今回の「かいぼり」に関連した一連のプログラムでは、実作業を伴う「保全参加型」の内容を試行したところ、有料設定にもかかわらず、募集開始直後に定員に達するなど、予想を大きく上回る反響が得られた。これは、市民の中に「単に自然を観察するだけでなく、自らの手で直接的に自然再生に貢献したい」という能動的な意欲が潜在していたことを示しており、重要な知見となった。

#### ②市民や企業との協働による保全の可能性

参加者は泥まみれになる実作業に対しても「役に立てたという達成感」や「自然との一体感」を感じており、満足度は非常に高かった。

このような「市民・企業の力」を保全の原動力として活用する手法は、今後の水辺の再生のみならず、生物多様性の向上を目的とした緑地管理においても大きな可能性を秘めている。今回試行した手法を発展させることで、教育普及と実効的な保全を両立させる「持続可能な管理システム」の構築を目指したい。

## 謝 辞

本プロジェクトの遂行にあたり、多大なるご尽力をいただいた関係各所の皆様に深く感謝申し上げます。

自然教育園の職員の皆様には、計画段階から完了まで、

一貫して本事業を支えていただきました。自然園ボランティアのみなさまには、イベント運営や実作業のご協力を賜りました。

「かいぼり」の企画運営においては、特定非営利活動法人 NPObirth スタッフの皆様には、その豊かな経験とノウハウをご提供いただき、安全かつ教育的なプログラムを実現することができました。また、物理的な環境整備の要となった排水ポンプの設置・管理、および捕獲された在来魚等を注水までの約3ヶ月間、バックヤードで大切に飼養・管理していただいた株式会社丸三興業のスタッフの皆様のプロフェッショナルな支えなしには、この事業の成功はあり得ませんでした。

国立科学博物館動物研究部の小松浩典氏（甲殻類の採集・同定）、東京都市大学の内田圭氏および帝京科学大学の片桐浩司氏（埋土種子の採取・調査）には、学術的な知見からご指導を賜りました。国立科学博物館広報・連携課の皆様には、イベント周知等にご尽力いただきました。

最後になりましたが、市民・企業向け各イベントに参加し、当園の自然再生を「自分事」として捉え、共に泥にまみれて汗を流してくださったすべての参加者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 国立科学博物館附属自然教育園（2022）天然記念物及び史跡旧白金御料地（国立科学博物館附属自然教育園）保存活用計画. [https://ins.kahaku.go.jp/albums/abm.php?d=3233&f=abm00011702.pdf&n=honzonkatuyoukeikaku\\_202203.pdf](https://ins.kahaku.go.jp/albums/abm.php?d=3233&f=abm00011702.pdf&n=honzonkatuyoukeikaku_202203.pdf)（参照 2026-03-25）
- 中江雅典・栗岩 薫・篠原現人. 2019. 国立科学博物館附属自然教育園の魚類相. 自然教育園報告（51）：27-32.
- 東京都環境局自然環境部. 2023. 東京都レッドデータブック 2023 - 東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版. 879pp.